

舟運活性化と市民運動

ふるさと都・夢づくり協議会
淀川舟運復活実行委員会

須知 裕曠



●「水の都」の最盛期

大阪の舟運はかつて「水の都」といわれるほど、文化経済面において、なくてはならない存在でした。大阪市は江戸時代、北に臨む淀川をはじめとして、神崎川、安治川、堂島川や土佐堀、道頓堀、長堀などを航路が縦横無尽に駆け巡り、その川を利用した舟運事業の盛況ぶりと、独特の風景がかもしだす風情は当時の人々の心に残る心象風景だったのです。

淀川では大阪・天満橋（八軒家）と京都・伏見を結んで往来する「三十石船」が盛んに往来し大いににぎわい、往時には1,000隻の三十石船が一日1,500人の旅客と800トンの貨物を運んでいました。その中継地として栄えた枚方宿には三十石船にこぎ寄せて、酒や食材を売りさばいた「くらわんか船」があり、「飯くらわんか。酒飲まんかい」と威勢のよい言葉が川面に響いていました。代金を数えた陶器は「くらわんか茶碗」と呼ばれ、今でも川底から引き揚げられることがあります。

川や堀に市民の生活が結びついていました。川には人が集まり、文化が生まれます。地名になった橋も多くあり、さまざまな上方文化に彩りを添えてきました。しかし、いつしか物資の輸送手段が水運から陸運へと代わり、独特の「水の都の風景」も変わってしまいました。残念ながら今では当時の様子を記憶している人も少なくなっています。

●蕪村と淀川舟運

江戸中期の俳人と謝蕪村は1716年、今の大阪市都島区毛馬町に生まれました。蕪村は若くして故郷を離れましたが、毛馬の閘門のある淀川べりで少年期を送ったのです。晩年は京都に移り住み関西へ帰ってきています。1996年、蕪村生誕280年のとき「ふるさと都・夢づくり協議会」が中心となって蕪村を軸にいろいろなまちおこしを始めました。

2001年は、蕪村が与謝姓を名乗って250年という節目にもあたり、蕪村をテーマに大阪市立美術館で「蕪村—そのふたつの旅」展が開催されることを知り、蕪村と淀川という切り口から、淀川ゆかりの蕪村らしく淀川近辺でも蕪村展を開催しようと、枚方市の淀川資料館で「蕪村と淀川・その時代展」を開催することになり、「この二つの蕪村展を結ぶことはできないだろうか、電車で回るのはおもしろくない。」、そこで蕪村自身も大阪や四国などへ出かけるために利用していた三十石船はどうだろうかと思いつきそれが昭和四十年代に姿を消して以来、三十五年ぶりの舟運復活となりました。単に舟運を復活させるのではなく、淀川と蕪村の関係なども考える文化イベントになりました。





●いきな舟旅

4月、5月とまさに春爛漫のもと舟は枚方大橋からスタートし淀川を下り、蕉村の生誕地である毛馬を通り、途中、最大2mの落差を調整する毛馬閘門から大川へ入ります。普段は通ることのできない毛馬閘門を国土交通省近畿地方整備局淀川工事事務所のご協力のもと、珍しい体験ができました。その後、中之島で下船するというコースです。乗船前には江戸時代の町並みが一部残る旧枚方宿を歩き、資料館で「蕉村と淀川その時代展」を見学し、下船後は「蕉村そのふたつの旅」を見学する。まさに「蕉村漬け」の一日を楽しみました。

船上では上方落語の名作「三十石船」を聴く落語会や句会を開催したり、作家の難波利三さんなどにも乗船していただき、淀川と蕉村にまつわる話を聞きながら、優雅な川の旅となりました。ふだん私たちは陸から淀川をながめていますが、



水の上から見る風景はまた違った味わいがあります。このツアーは大変好評で、当初予定していた4回を9回に増やしたのですが、それでもあっといいう間にいっぱい状況になりました。こ

のことからもわかるように、人々が川との触れ合いを求めていることは明らかです。そして、改めて川との触れ合いが新鮮な感動を呼んでいるのも事実なのです。



●「生きた川」から「活きた川」へ

大阪の舟運を復活させ、大阪らしさを人々の意識の中からも復活させよう。川環境を整えて「生きた川」とし、さまざまな芸能文化の融合と活性化をうながす「活きた川」にすることを目的として「NPO法人大阪・水かいどう808」を設立しました。市民・自治体・企業との連携を図りながら活動を進めていきたいと思っています。

大阪の八百八橋にちなんで「808」と命名し、8月8日にこけらおとしのイベントを二つ開催しました。一つは「大阪・川と橋の物語展／写真でつづる八百八橋」と題し、大阪の風情ある歴史を振り返り、楽しくもなつかしい写真展。もう一つは大変好評でした舟運ツアーを開催しました。

今回の舟運ルートは大阪市内を遊覧するもので、堂島川から土佐堀川、大川をさかのぼり、毛馬閘門から淀川へ。Uターンして東横堀川、ネオンまたたく道頓堀川を通過して湊町リバープレイスに着くというコース。約3時間の舟旅となりました。東横堀川のロケーションはどうにもならないとよく言われますが、船上から見るとロマンチックで、高速道路の柱脚と橋桁のコントラストがたいへん面白いことがよくわかり、新たな発見でした。

●楽しさからの水都再生

2004年、8月8日。今から3年後に「道頓堀大水泳大会」を開催します。

阪神タイガースや近鉄バッファローズが優勝したときに飛び込む人はいても、現状では泳ぐにはちょっと……ではあります。ならば泳げるようにするには何をしたらいいのか。

行政任せにせず、市民一人ひとりが、川への考え方を変えなければ……。

河川浄化をしたら泳げますよではなく、道頓堀で泳ぐために河川浄化に努める。楽しさからのアプローチです。初めに楽しさありき。そのにぎわいから都市の活力アップにつながるさまざまな動きが始まっていくと思います。

水都・大阪の魅力を引き出すため、市民の知恵を結集していきましょう。水先案内人は市民一人ひとりなのですから。

●おわりに

現在、淀川舟運復活への動きが行政、学識経験者、市民団体などで構成された淀川水系流域委員会が開催され、気運が高まっているように思われますが、枚方大橋から京都伏見間の浅瀬が難問であり、舟運を復活させる為に川筋を掘り下げることが世論には受けない。

そのための流域委員会であろうと思います。

視点をかえて舟運を復活させるだけであれば、船そのものに工夫（喫水を浅くする）をすれば解決されるように思われます。実際に喫水を浅くして50人程が乗船できる船は可能であります。それらを今後、提案したいと思っております。



舟から見た道頓堀川:写真提供 パシフィックコンサルタンツ(株)
松田 尚郎 氏